

少年鑑別所における自習ワークブックを用いた薬物再乱用防止プログラム：その有効性と利用可能性

松本俊彦¹⁾，千葉泰彦^{2,3)}，今村扶美⁴⁾，小林桜児^{1,4)}，和田 清¹⁾

Toshihiko Matsumoto, Yasuhiko Chiba, Fumi Imamura, Ohji Kobayashi, Kiyoshi Wada

少年鑑別所に入所する薬物乱用者85名に対し、我々が開発した再乱用防止のための自習ワークブック「SMARPP-Jr.」を実施し、介入前後の評価尺度上の変化から、薬物問題の重症度と介入効果の相違について検討した。その結果、薬物問題の重症度に関係なく、自習ワークブックの実施後には、問題意識の深まりと治療動機の高まりを反映する評価尺度の得点が顕著に上昇していた。その一方で、薬物欲求に抵抗できる自信、自己効力感には著明な変化がみられなかった。以上より、自習ワークブックを用いた矯正施設での介入は、薬物乱用に対する問題意識を深め治療動機を向上させるのには有効であるが、薬物依存に対する自己効力感を高めるには、施設出所後に、地域における継続した支援体制が存在する必要があると考えられた。

<索引用語：若年者，薬物乱用，再乱用防止プログラム，少年鑑別所，自習ワークブック>

はじめに

わが国では、若年の薬物乱用者の多くは、保健医療機関ではなく、少年鑑別所や少年院といった司法関連機関で処遇されている。しかし、少年院でこそ矯正教育の一環として薬物乱用防止教育がなされているものの、少年鑑別所では、系統的な薬物再乱用防止教育がほとんどなされていないのが現状である。

それには2つの理由がある。1つは人権上の問題である。少年鑑別所入所者は家庭裁判所における少年審判を控えた立場、すなわち、まだその非行・犯罪事実が確定していない段階にある。いいかえれば、成人における未決拘留中と同じ「推定無罪」の身柄なのである。したがって、たとえ善

意からであっても薬物乱用防止教育を行えば、少年の付添人から人権侵害との非難を受ける可能性がないとはいえない。もう1つは、少年鑑別所が求められている業務の問題である。少年鑑別所に課せられた業務はあくまでも非行性・犯罪性に関する鑑別にあり、司法関係者の中には、鑑別期間中の矯正教育によって少年本来の姿が見えにくくなることを危惧する者もいる。

とはいえ、精神保健的介入といった視点で見た場合、若年の薬物乱用者に対する介入の場として少年鑑別所ほど適切な場はない。というのも、少年鑑別所には、少年院収容となるような重篤な薬物依存者から、試験観察・保護観察といった地域内処遇の対象となるような初期乱用者まで幅広く

著者所属：1) 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部 2) 横浜少年鑑別所

3) 現・横浜市立市民病院検査部 4) 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター病院

本論文は、PCN誌に掲載された最新の研究論文⁶⁾を編集委員会の依頼により、著者の1人が日本語で書き改め、その意義と展望などにつき加筆したものである。

集まっており、多くの若年薬物乱用者を介入の対象とすることが可能だからである。また、逮捕・保護からまだ時間が経過しておらず、しかも少年審判を控えていることの緊張感に加えて、薬物関連の交遊関係から離れた静かな環境であるために、少年たちは集中して作業に取り組むことができる。

このような認識から、我々は施設管理者の理解を得て、少年鑑別所における自習ワークブックを用いた薬物問題への介入を試み、自らの薬物問題に対する認識の深まりと援助必要性の自覚が得られ、参加者の90%が「役に立つ」という感想を抱いたことを報告している⁸⁾。しかし、自習ワークブックによる介入効果が、薬物問題の重症度を問わないものなのかどうかについては、まだ明らかではない。そこで本研究は、薬物問題の重症度と自習ワークブックによる介入効果の関係を明らかにすることを目的として実施された。

I. 研究の方法および結果

1. 研究方法

1) 自習ワークブック

介入に用いた自習ワークブックは、我々が米国の Matrix model¹⁵⁾を参考にして実践している包括的外来薬物依存治療プログラム (Serigaya Methamphetamine Relapse Prevention Program; SMARPP)^{3,9)}のワークブックを平易化・簡略化し、さらに少年鑑別所職員との協議を重ねて作成したものであり、「SMARPP-Jr.」と名付けられている⁵⁾。その内容は、薬物依存に関する疾病教育的な知識提供、ならびに、薬物欲求への対処法の習得という、認知行動療法的なスキルトレーニングから構成され、若年薬物乱用者の再乱用防止に資することを目的としている。ワークブックの分量は、49ページの「読む冊子」と19ページの「書きこみ用冊子」の2分冊形式からなり、表1に示すように全12回から構成されており、1日1回分ずつ仕上げていけば、2~3週間という鑑別所収容期間内に終了できることを想定している。

なお、ワークブックを2分冊形式にしたのは、

理由があった。我々は、出所後に薬物再使用となった際に、再び逮捕されるまで薬物を使い続けるのではなく、地域の支援資源につながることを期待し、ワークブックの巻末に近隣の専門病院や精神保健福祉センター、民間リハビリ施設、自助グループの連絡先を掲載した。しかし、少年鑑別所には、「被収容少年が字を書き込んだ紙を退所時に外に持ち出してはならない」という規則があるために（収容中に少年たちが連絡先を紙に書いて交換し、退所後に不良交遊を拡大するのを防ぐため）、すでに少年たちが回答を書き込んだワークブックは外部に持ち出すことが困難である。そこで我々は、ワークブックを2分冊構成とすれば、「読む冊子」の方は出所時に持ち帰ることができると考えた。

2) 対象

2009年1月~2010年12月の2年間にA少年鑑別所に入所した全少年2,078名（男子1,829名、女子249名）のうち、何らかの薬物使用経験があり、かつ、ICD-10「F1:精神作用物質使用による精神と行動の障害」における「有害な使用」もしくは「依存症候群」に該当する者は98名であった。このうち89名から本研究への参加の同意が得られたが、4名はワークブック終了前に出所したために、最終的な対象者は85名（男子56名、女子29名：平均年齢 $[\pm]$ 標準偏差 $]$; 17.4 $[\pm 1.3]$ 歳)となった。

対象者85名がこれまで使用した経験のある薬物の種類、ならびに最近における最も使用頻度の高い薬物の種類としては、71.8%に大麻の生涯使用経験が認められ、対象者の48.2%が入所直前の生活において大麻を最も頻用していた。

3) 実施方法

少年鑑別所医務課医師による入所時診察によって対象候補者としての条件を備えていることが判明した少年に対して、医師から「あなたには薬物の問題がある。この機会に、自分の薬物問題について勉強してみてもどうか？」とワークブック実施を提案した。同意が得られた場合には、後述する3種類の自記式評価尺度に回答してもらったの

表1 自習ワークブック「SMARPP-Jr.」の内容

第1回	薬物をやめることに挑戦してみよう	薬物を使うことのメリット・デメリット、薬物をやめることのメリット・デメリットについて考え、いま現在における自分の正直な気持ちについて考えてみる。
第2回	薬物依存からの回復段階	薬物をやめていく過程で見られる5つの段階(離脱期・ハネムーン期・『壁』期・適応期・解決期)について知識と理解を深める。
第3回	引き金と欲求	薬物の欲求を刺激する、「引き金」→「考え」→「欲求」→「使用」のプロセスについて理解を深め、様々な種類の思考ストップ法について学ぶ。
第4回	あなたのまわりにある引き金について	薬物の欲求を刺激する「引き金」のなかでも、特に「外的な引き金」に関する理解を深める。
第5回	あなたのなかにある引き金について	感情や気分、疲労感などといった、「内的な引き金」に関する理解を深めるとともに、その対処法について考える。
第6回	新しい生活のスケジュールを立ててみよう	「引き金」と遭遇する危険の少ない、安全で現実的なスケジュール作りに関する理解を深め、実際に自分なりのスケジュールを作ってみる。
第7回	依存症ってどんな病気?	「依存症」という病気がどのような特徴を持った病気なのかについて理解を深め、自分の薬物問題のせいでどのような人を巻き込んできたのかについて考える。
第8回	危険な状況を察知する	薬物の欲求が高まる状況として有名なH. A. L. T.(Hungry, Angry, Lonely, Tired)とアルコールの危険性について理解を深める。
第9回	再発を防ぐには	行動・思考面における「引き金」ともいえる「依存症的行動」と「依存症的思考」に関する理解を深め、自分の場合についても考える。
第10回	再使用のいいわけ	再発の兆候である「再使用のいいわけ」について理解を深め、自分の場合はどのようないいわけを使ってきたのかについて振り返る。
第11回	「強くなるより賢くなれ」	自分の「引き金」と「対処法」、それからスケジュールについて復習し、確実なものとする。
第12回	回復のために——信頼と正直さ	薬物を使わない生活を続けているうえで重要な「正直さ」と「援助を求めること」について理解を深める。
巻末付録	薬物乱用問題の援助資源	被収容少年が居住する地域における社会資源(専門医療機関、精神保健福祉センター、DARCなど)に関する情報を提供する。

ちに(実施前評価)、各自の居室で自習ワークブックに10~14日間かけて取り組んでもらい、終了直後に2種類の自記式評価尺度への回答を求めた(実施後評価)。

4) 評価尺度・質問紙

(1) DAST-20 (Drug Abuse Screening Test, 20 items)

これは違法薬物および医療用薬物などの乱用を

スクリーニングする目的から作成された、20項目からなる自記式評価尺度である¹⁶⁾。本研究では、対象者の薬物問題の重症度を評価するために、日本語版DAST-20¹⁷⁾を介入前に実施し、得られた得点にもとづいて、対象者を1~5点を「軽症群」、6~10点を「中等症群」、11~20点を「重症群」という3群に分類した。

表 2 重症度分類による薬物依存に対する自己効力感スケールと SOCRATES-8D の比較

	薬物問題の重症度分類			F (df)	P
	軽症群 N=46	中等症群 N=28	重症群 N=11		
薬物依存に対する自己効力感スケール 総得点 [±標準偏差]*	95.83±9.691	83.71±20.777	76.00±25.436	8.765 (2, 82)	P<0.001
SOCRATES-8D 総得点 [±標準偏差]	63.57±9.050	67.61±12.294	70.18±9.261	2.53 (2, 82)	P=0.086

SOCRATES-8D, Stages of Change Readiness and Treatment Eagerness Scale, 8th version for drug dependence

*P<0.001; Bonferroni's post hoc test, 中等症群>重症群, P=0.009; 軽症群>重症群, P=0.002

(2) 薬物依存に対する自己効力感スケール

森田ら¹⁴⁾が独自に開発した、薬物に対する欲求が生じたときの対処行動にどれくらいの自信、または自己効力感をもっているかを測定する自記式評価尺度である。この尺度は、2つのパートから成り立っている。1つは、場面を越えた全般的な自己効力感に関する5つの質問からなる部分であり、5件法で回答する。もう1つは、個別的な場面において薬物を使わないでいられる自信を尋ねる11の質問からなる部分であり、7件法で回答する。本研究では、本尺度を介入前後に実施し、「全般的な自己効力感」合計得点、「個別場面での自己効力感」合計得点、および尺度全体の合計得点の変化を比較した。

(3) Stages of Change Readiness and Treatment Eagerness Scale (SOCRATES)

Miller と Tonigan¹¹⁾によって、アルコール・薬物依存に対する問題意識と治療に対する動機付けの程度を評価するために開発された、19項目からなる自記式評価尺度である。原語版では、各質問は「病識」「迷い」「実行」という3つの因子構造をもつことが確認されている。「病識」が高得点の場合には、「自分には薬物の問題があり、このまま薬物を続けていけば様々な弊害を生じるので、自分を変えていく必要がある」と認識していることを示し、「迷い」が高得点の場合には、「自分は薬物使用をコントロールできていない、周囲に迷惑をかけているかもしれないと考えている」ことを、そして「実行」が高得点の場合には、「自分の問題を解決するために何らかの行動を起こし始めてい

る、あるいは、誰かに援助を求めようと考えている」ことを示す。事実、SOCRATES 総得点は治療準備性の高まりと正の相関関係を示し¹³⁾、動機付けの乏しい薬物乱用者に対する短期介入の場合には、高得点の者ほど治療継続率が高いという¹²⁾。本研究では、薬物依存用に開発された SOCRATES-8D について、小林ら⁴⁾が逆翻訳などの手続きを経て作成した日本語版を用いて、ワークブック実施前後に評価を行った。

2. 研究結果

対象者85名の DAST-20 得点は1~18点に分布し、その平均得点 [±標準偏差] は 5.64 点 [±3.41] であった。DAST-20 による評価の結果、対象85名のうち、46名が「軽症群」、28名が「中等症群」、11名が「重症群」に分類された。

表2に、ワークブック実施前における各群の薬物依存に対する2つの評価尺度の総得点を比較した結果を示す。その結果、3群間で薬物依存に対する自己効力感スケール得点に有意差が認められ (P<0.001)、Bonferroni の post hoc test により、その有意差が中等症群と重症群 (P=0.009)、軽症群と重症群 (P=0.002) とのあいだのものであることが明らかになった。

まず、対象者85名全体に対するワークブックによる介入の結果を提示しておく。表3に、介入前後における評価尺度の変化を比較した結果を示す。本ワークブックによる介入後、薬物依存に対する自己効力感尺度の総得点 (P=0.044)、および、下位因子の1つである「個別場面での自己効

表3 介入前後の薬物依存に対する自己効力感スケールと SOCRATES-8D の比較 (N=85)

		実施前		実施後		z	P
		平均点	標準偏差	平均点	標準偏差		
薬物依存に対する 自己効力感スケール	一般的な自己効力感 合計	22.48	3.83	22.33	4.59	1.146	0.252
	個別場面の自己効力感 合計**	66.79	14.60	69.44	10.44	2.654	0.008
	総得点*	89.27	17.97	91.76	15.18	2.018	0.044
SOCRATES-8D	病識***	23.85	4.83	25.98	5.64	4.325	<0.001
	迷い**	11.27	3.63	12.18	3.67	2.736	0.006
	実行***	30.64	6.44	33.71	6.28	5.531	<0.001
	総得点***	65.75	10.44	71.86	11.62	5.750	<0.001

SOCRATES-8D, Stages of Change Readiness and Treatment Eagerness Scale, 8th version for drug dependence

*P<0.05, **P<0.01, ***P<0.001

力感」(P=0.008)が有意に上昇した。一方、もう1つ下位因子である「全般的自己効力感」には有意な変化は認められなかった。また介入後に、SOCRATES-8Dの総得点(P<0.001)の有意な上昇が、それから、「病識」(P<0.001)、「迷い」(P=0.006)、「実行」(P<0.001)という3つの下位因子すべてについても有意な上昇が認められた。

表4は、重症度の異なる各3群における介入前後の評価尺度得点の変化を示したものである。軽症群では、薬物依存に対する自己効力感スケールについては、下位因子「個別場面の自己効力感」の得点(P=0.034)が有意に上昇していたものの、総得点では有意な変化は見られなかった。一方、SOCRATES-8Dについて、総得点(P<0.001)の有意な上昇、さらに参考結果として、下位因子の「病識」(P=0.001)と「実行」(P<0.001)についても有意な得点上昇が認められた。中等症群では、介入前後で薬物依存に対する自己効力感スケールには有意な変化は認められなかったが、SOCRATES-8Dについては、総得点(P=0.010)、ならびに下位因子の「実行」(P=0.003)に有意な得点上昇が認められた。重症群では、薬物依存に対する自己効力感スケールの総得点には有意な変化が認められなかったが、下位因子である「個別場面での自己効力感」(P=0.045)に有意な上昇が認められた。また、SOCRATES-8Dの総得点、ならびに下位因子の「病識」(P=0.016)に有意な得点上昇が認められた。

II. 考 察

1. なぜ自習ワークブックなのか？

わが国では、10代の若年薬物乱用者は様々な援助資源から二重三重に疎外されている。若年薬物乱用者は一般精神科や児童精神科から忌避されやすく、薬物依存専門医療機関でしか対応してもらえないが、そもそもそのような専門医療機関自体、きわめて数が少なく⁷⁾、しかも、若年者に特化した治療プログラムをもつ施設は皆無といってよい。薬物依存症からの回復のための民間リハビリ施設にしても、同じ問題を抱えている。重篤な成人の薬物依存者ばかりのミーティングに参加するのは、軽症の若年薬物乱用者にとっては、必ずしも適切な治療環境とはいえない場合が少くない。

10年来、筆頭著者は定期的に少年鑑別所で被收容者の診療を行い、その中で多数の若年の薬物乱用者と出会ってきた。少年鑑別所とは、軽症から重症まであらゆる種類の薬物問題を抱えた少年たちが一度は通過する場所である。それだけに、「もしも收容中の2~3週間のあいだに何らかの意義ある介入や情報提供ができるのなら、これほど効率的なことはない」と考え、そのことを折に触れて施設側に訴えていた。

こうした思いに賛同してくれたのが、当時の少年鑑別所医務課長を務めていた千葉(第二著者)であった。彼と議論を重ねる中で、「矯正教育をやってはならない」とされている少年鑑別所で、

表 4 薬物問題の重症度別の薬物に対する自己効力感スケールと SOCRATES-8D の変化

			実施前		実施後		z	P
			平均点	標準偏差	平均点	標準偏差		
軽症群 (N=46)	薬物依存に対する 自己効力感スケール	全般的な自己効力感 合計	23.67	2.49	23.52	3.54	1.139	0.255
		個別場面の自己効力感 合計*	72.15	7.88	74.65	3.40	2.124	0.034
		総得点	95.83	9.69	98.17	6.50	1.601	0.109
	SOCRATES-8D	病識**	22.39	4.11	24.87	5.56	3.453	0.001
		迷い	9.91	3.14	10.65	3.25	1.730	0.084
		実行***	31.26	5.59	34.52	5.60	4.255	<0.001
		総得点***	63.57	9.05	70.04	11.37	4.564	<0.001
中等症群 (N=28)	薬物依存に対する 自己効力感スケール	全般的な自己効力感 合計	21.43	4.16	20.75	5.00	0.290	0.977
		個別場面の自己効力感 合計	62.29	16.95	63.79	14.55	0.634	0.526
		総得点	83.71	20.78	84.54	17.53	0.259	0.796
	SOCRATES-8D	病識	24.82	4.81	26.36	5.53	1.773	0.076
		迷い	13.00	3.40	13.75	3.43	1.364	0.173
		実行**	29.79	7.65	32.71	7.10	2.939	0.003
		総得点*	67.79	12.29	72.82	12.28	2.585	0.010
重症群 (N=11)	薬物依存に対する 自己効力感スケール	全般的な自己効力感 合計	20.18	5.74	21.36	4.95	1.194	0.233
		個別場面の自己効力感 合計*	55.82	20.33	62.00	17.79	2.003	0.045
		総得点	76.00	25.44	83.36	22.42	1.960	0.050
	SOCRATES-8D	病識*	27.45	5.57	29.64	4.97	2.409	0.016
		迷い	12.55	4.08	14.55	3.21	1.727	0.084
		実行	30.18	6.75	32.82	6.90	1.847	0.065
		総得点*	70.18	9.26	77.00	9.95	2.542	0.011

SOCRATES-8D, Stages of Change Readiness and Treatment Eagerness Scale, 8th version for drug dependence

*P<0.05, **P<0.01, ***P<0.001

何とか薬物再乱用防止プログラムを実施できる「抜け道」が見つかったのである。それには2つの条件が必要であった。1つは、「矯正教育」としてプログラムを実施するのではなく、性感染症予防教育のような、「健全育成のための情報提供」として行うこと、そしてもう1つは、少年鑑別所職員の負担とならない方法論——それが「自習ワークブック」を用いた介入を着想した理由であった——を採用することであった。

2. 自習ワークブック「SMARPP-Jr.」の意義と効果

すでに我々は、「SMARPP-Jr.」を用いた介入についていくつかの報告を行っている。今回報告した研究を含めた少年鑑別所における試み^{8,9)}のほかに、刑事施設入所中の成人薬物乱用者を対象と

した介入も試みている^{5,10)}。これら一連の試みは、自習ワークブック単独による物質乱用・依存に対する介入研究としては最初のものである。海外には、問題飲酒者に対する自習ワークブックを用いた短期介入の有効性に関する報告²⁾が存在するが、その介入は、自習ワークブックを治療コンポーネントの一部とする包括的なものであり、ワークブック単独の効果を検証した研究とはいえない。

また、今回の試みは、少年施設における薬物問題に対する介入研究としても希少な価値をもつ。これまで国内外の多くの少年施設において薬物乱用に対する矯正教育が行われてきたはずだが、その介入に関する効果測定としては、「運動療法」に関する報告¹⁾くらいしか見当たらない。その意味でも、本研究は、少年施設における薬物問題に対

する介入研究として独自の意義がある。

本研究では、少年鑑別所に入所する薬物乱用者に対して自習ワークブックを実施したところ、薬物依存に対する自己効力感スケール総得点の軽微な上昇、ならびに、SOCRATES-8D 総得点の顕著な上昇が認められた。とりわけ SOCRATES-8D 得点は、薬物問題の重症度にかかわらず有意に上昇していた。これは、すでに我々が報告した同様の試み⁸⁹⁾と同じ結果であり、本ワークブックが、「薬物の誘いを受けても大丈夫」といった、薬物欲求に抵抗できる自信の高まりよりも、「問題は思っていたよりも深刻である」「援助を受ける必要がある」といった、問題意識の深化や治療の動機付けに対して効果があることが確認された。

この結果は、薬物乱用者に対する短期介入による効果としては満足すべきものである。我々の臨床経験からいえば、薬物依存に対する自己効力感の高さは、「自分はまだ大丈夫」という、問題の過小視と表裏一体のものであることが少なくない。したがって、自己効力感を高めるよりも、問題意識を深め、治療動機を高めることの方が、移送された少年院での矯正教育の効果を高め、地域において専門医療機関への受診を促すことが期待できるように思われる。また、問題意識を深めるだけでも、それが再乱用に対して抑止的にはたらく場合もあろう。

一方、自習ワークブックによる介入では、薬物依存に対する自己効力感スケール得点を十分に上昇させることはできなかった。対象全体ではかろうじて有意な上昇、重症度別検討では、軽症群と重症群ではそれぞれの下位因子である「個別場面の自己効力感」の得点については有意な上昇が認められたものの、総得点では有意とはいえなかった。この結果は、ワークブック上で対処スキルを習得するだけでは薬物依存に対する自己効力感を高めるのには不十分であることを意味している。おそらく薬物依存に対する自己効力感が高まるには、地域において「学んだ対処スキルを使えば、薬物を使わなくても生活できる」という体験の積み重ねが必要である。

その意味でも、この自習ワークブックが少年鑑別所内の自習教材にとどまることなく、地域の精神科医療機関や保健機関・児童福祉機関における援助ツールとして活用され、司法機関と地域とのあいだで一貫した薬物乱用者支援が実現する必要がある。

おわりに

—今後の展望—

実は我々は、本研究における最も重要な知見は、研究に同意した 89 名中 85 名 (95.5%) がこの 50 ページ近いワークブックを終了した、という事実ではないかと考えている。もしも同様の介入を地域内で行った場合、はたしてこれほどの高い終了率が得られるであろうか？ はなはだ疑問である。地域では連日連夜の不良交遊や薬物浸りの生活に追われ、自分と向き合う時間がなかった少年たちも、少年審判を控えた少年鑑別所という静かな環境では内省に適した時間を得ることができると。その時間を有意義に過ごす方法として、この自習ワークブックは試みる価値のあるものである。もちろん、本研究には様々な限界がある。まず、対照群を欠いており、少年審判を控えた立場であることが、自記式評価尺度の回答に影響を与えた可能性も完全には除外できない。何よりも、評価のエンドポイントが尺度得点の変化という代理変数でしかない。残念ながら、司法的処遇に係属している者に対して、「対照群」を設定したり、処遇後の追跡調査を実施したりすることは、倫理的に克服困難な問題である。

我々の少年鑑別所における自習ワークブックの試みは、その後、近県にある他の少年鑑別所や少年院にも伝わり、いくつかの少年施設で採用された。また、成人を対象とする刑務所の一部や精神科医療機関でも、少ないマンパワーを補う教材として用いられるようになった。とはいえ、この試みが、「少年鑑別所では矯正教育を行うべからず」というわが国の司法機関規則に抵触しているのは事実である。それもあって、理解ある少年鑑別所所長が異動し、プロジェクト実現に尽力してくれ

た医務課長の千葉が退職したのが1つの区切りとなっていて、このプロジェクトは一旦終了となった。

しかし、我々の試みは新たな動きを生み出した。平成24年度より法務省矯正局少年矯正課の指示のもと、筆者らが協力し、全国の少年院における薬物再乱用防止プログラムが全面的に刷新されることとなったのである。そのプログラムは、まさにこの「SMARPP-Jr.」をベースにしたものであり、「J. MARPP」と名付けられている。

なお、本発表に関連して開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) Collingwood, T. R., Sunderlin, J., Reynolds, R., et al.: Physical training as a substance abuse prevention intervention for youth. *J Drug Educ*, 30 ; 435-451, 2000
- 2) Fleming, M. F., Mundt, M. P., French, M. T., et al.: Brief physician advice for problem drinkers : Long-term efficacy and benefit-cost analysis. *Alcohol Clin Exp Research*, 26 ; 36-43, 2002
- 3) 小林桜児, 松本俊彦, 大槻正樹ほか: 覚せい剤依存者に対する外来再発予防プログラムの開発—Serigaya Methamphetamine Relapse Prevention Program (SMARPP) —. *日本アルコール・薬物医学会雑誌*, 42 ; 507-521, 2007
- 4) 小林桜児, 松本俊彦, 千葉泰彦ほか: 少年鑑別所入所者を対象とした日本語版 SOCRATES の因子構造と妥当性の検討. *日本アルコール・薬物医学会雑誌*, 45 ; 437-451, 2010
- 5) 小林桜児, 松本俊彦, 今村扶美ほか: PFI (Private Finance Initiative) 刑務所における薬物依存離脱指導の効果に関する研究: 自習ワークブックとグループワークによる介入—第2報: 重症度別による効果の分析—. *日本アルコール・薬物医学会雑誌*, 46 ; 368-380, 2011
- 6) Matsumoto, T., Chiba, Y., Imamura, F., et al.: Possible effectiveness of intervention using a self-teaching workbook in adolescent drug abusers detained in a juvenile classification home. *Psychiatry Clin Neurosci*, 65 ; 576-583, 2011
- 7) 松本俊彦, 小林桜児: 薬物依存者の社会復帰のため
- 8) 松本俊彦, 今村扶美, 小林桜児ほか: 少年鑑別所における薬物再乱用防止教育ツールの開発とその効果—若年者用自習ワークブック「SMARPP-Jr.」—. *日本アルコール・薬物医学会雑誌*, 44 ; 121-138, 2009
- 9) 松本俊彦, 千葉泰彦, 今村扶美ほか: 少年鑑別所における自習ワークブックを用いた薬物再乱用防止プログラムの試み〜重症度による介入効果の相違に関する検討. *精神医学*, 52 ; 1161-1171, 2010
- 10) 松本俊彦, 今村扶美, 小林桜児ほか: PFI (Private Finance Initiative) 刑務所における薬物依存離脱指導の効果に関する研究: 自習ワークブックとグループワークによる介入—第1報—. *日本アルコール・薬物医学会雑誌*, 46 ; 279-296, 2011
- 11) Miller, W. R., Tonigan, J. S.: Assessing drinkers' motivation for change : The Stage of Change Readiness and Treatment Eagerness Scale (SOCRATES). *Psychol Addict Behav*, 10 ; 81-89, 1996
- 12) Mitchell, D., Angelone, D. J.: Assessing the validity of the Stages of Change Readiness and Treatment Eagerness Scale with treatment-seeking military service members. *Mil Med*, 171 ; 900-904, 2006
- 13) Mitchell, D., Angelone, D. J., Cox, S. M.: An exploration of readiness to change processes in a clinical sample of military service members. *J Addict Dis*, 26 ; 53-60, 2007
- 14) 森田展彰, 末次幸子, 嶋根卓也ほか: 日本の薬物依存症者に対するマニュアル化した認知行動療法プログラムの開発とその有効性の検討. *日本アルコール・薬物医学会雑誌*, 42 ; 487-506, 2007
- 15) Rawson, R. A., Marinelli-Casey, P., Anglin, M. D., et al.: A multi-site comparison of psychosocial approaches for the treatment of methamphetamine dependence. *Addiction*, 99 ; 708-717, 2004
- 16) Skinner, H. A.: The drug abuse screening test. *Addict Behav*, 7 ; 363-371, 1982
- 17) 鈴木健二, 村上 優, 杠 岳文ほか: 高校生における違法性薬物乱用の調査研究. *日本アルコール・薬物医学会雑誌*, 34 ; 465-474, 1999